

ここで取り上げられている思想家をあげると、大塩中齋、水戸学の藤田東湖から吉田松陰。明治維新後の三島中洲・三宅雪嶺・内村鑑三等から国家主義者や右翼と言われる人達。そして最後に安岡正篤、そして三島由紀夫の陽明学（といわれるが、そうでないという）までを分析し批判的に論じている。

思想を客観的に理解する者は興味をもって読めるが、内側から理解し、実践する者はどのように読むだろうか。

○林田明大著『財務の教科書―「財務の巨人」山田方谷の言動力』

二〇〇六年一〇月初版 三五館 B6版 365頁

本書は、第一章の「朝は四時から働けという家訓」から第十五章の「現代に息づく方谷の精神」まで、十五章にわたって、山田方谷の人生を描いたもの。

山田方谷には、山田準編纂『山田方谷全集』があり、山田琢著『山田方谷・三島中洲』（『双書日本の思想家』41）があり、文章については、浜久雄著『山田方谷の文―方谷遺文訳解』、詩については、宮原信著『山田方谷の詩 全訳』がある。また矢吹邦彦著『炎の陽明学―山田方谷伝』同『ケインズに先駆けた日本人―山田方谷外伝』などの書もある。それらを読破して得られたものだけでなく、関係ある人々についての資料から得られた、数多くの知識により、非常に詳しくまたおもしろく描いた伝記である。本書を読むと、この時代の、また陽明学や陽明学者などにつきいろいろな知識が得られる。それだけでなく、ちよつと寄り道をして、考え方に関係あるという意味で、氏の得意とするシユタイナーや、ゲーテ、ドライ・

ラマの話までがあり、現代化する意味で、現在の経済人の陽明学思想の実践者までが登場する。この人達は、すでに氏の『真説陽明学入門』や『雀鬼と陽明』などに登場していた人だが、研究書というわけではないが、啓蒙する意味で大切な書といえよう。

○『全訳本王陽明全集』（全六巻）

―曾國藩終生研習的書 儒家三大聖人之一―

主編 楊光 副主編 姜波

編集委員 李林生、李艷玲

一九九七年八月 北京燕山出版社刊。B6版、3260頁。

本書については、前言に明の隆慶六年（1572）、謝延傑の刻本に基づいて、中華民国二十四年の沈卓然の重編王陽明全集序を付して刊行されたのを全訳したものである。

訳者が誰かは記載がなく、ただ原文と訳文があるだけのもの。

○『陽明学刊』第一輯

主編 張新民

二〇〇四年十一月 貴州人民出版社 刊

張尚徳「論王陽明的悟道」

徐明徳「王陽明对中国心性哲学的詮釈」

銭明「譜牒中的王陽明逸文見知録」

張明「王陽明与黔中王学」

他に儒学思想研究の論文等、六篇が収められている。

（正田啓佑）